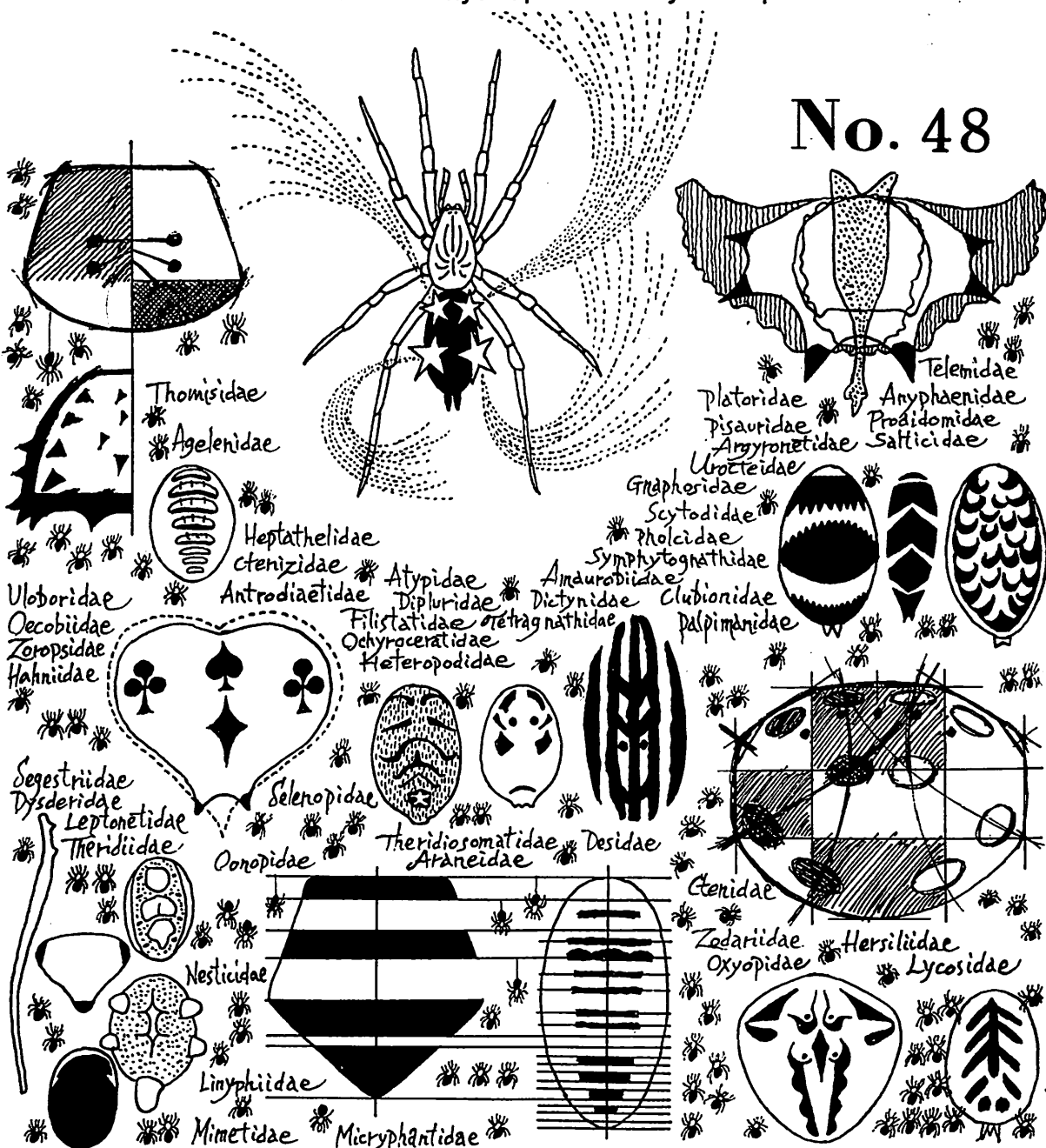


KISHIDAIA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No. 48



KISHIDAIA No.48 目 次

アシダカグモの長期飼育報告(Ⅱ)	萱 嶋 泉	1
民話における蜘蛛の存在価値	貞 元 己 良	5
卵ノウ2種の観察	佐 藤 幸 子	15
東京蜘蛛談話会観察報告 1981年夏 赤城山の真正蜘蛛類	林 俊 夫	17
神奈川県立野庭高等学校周辺の真正蜘蛛類	谷 川 明 夫	23
編 集 後 記	貞 元 己 良	30

アシダカグモ *Heteropoda venatoria*(Linne')の 長期飼育報告(Ⅱ)

萱 嶋 泉

4年目(昭和47年5月1日～昭和48年4月30日)

5月1日午後7時に、このクモの飼育箱に前回交尾試験に使用した、同じ雄(飼育箱№1)を入れると、雌は箱の隅に逃げてゆき、すくんでしまった。約30分経過した頃から互に意識するようになり、相手を注意深く見ながら動きはじめた。雌は左右の第1歩脚をゆるやかに上下させながら、雄に近づいてゆく。雌もやはり左右の第1歩脚を曲げたり伸ばしたりして、雄がくる方に、向きを変えて身がまえるような格好になった。そろそろ求愛行動の開始かなと見てみると、雄がさらに接近してゆき、歩脚で雌をさわりはじめた。雌も歩脚で雄の歩脚や体をさわっている。しかしそれ以上互に接近しようとはしない。10分ぐらいたった時に、雌は急に飼育箱の隅に退いて、細い糸をせわしくはりだした。それは精網を作る動作と思われるけれども、飼育箱の隅をただ小走りに、やたらに糸をかけてゆくだけで、精網の形は出来ない。そのうちに箱の天井から約15cm下に、精網らしい三角形の粗末な網が完成した。はり終えた雌は精網のそばに歩脚をだらりと伸べて静止したまゝで少しも動かない。私は何時になったら精液を出してくれるのかと思いながら観察をつづけたが、5月2日午前0時30分になっても、雌はそのままの姿勢である。それで、観察を中止し寝ることにした。

5月2日午前6時に箱を見ると、雄が精網を跨ぐようにして、腹部を精網に、なんべんも押つける動作をしていた。精網の上にはまだ精液は出されていない。それから少しして、押しつけていた腹部を上げた時、きらっと光る一滴の精液が網の上にあるのが見えた。雌は唯一滴精液を出しただけで、精網からおりて、飼育箱の天井に退いてしまった。はじめの間はじいっとしていたが、左右の触肢を口にもってゆき、丁寧にぬぐいはじめた。触肢がすむと、第1歩脚から順に第4歩脚まで、なんべんも綺麗にしてゆく。私はこの動作をクモの化粧といっているが、これはクモ特有のものでなく、ハエやゴキブリのような昆虫にも見られるものである。

この時の化粧には、特に時間をかけて行った。それからゆっくりと精網に近づいて、左の触肢を網の下側から伸ばして、精液に触肢の先端にある栓子をさしこんで、生殖球に吸いこみはじめた。ところが網の上にある精液は見るまに全部吸収されてしまった。左の触肢の生殖球には、まだ余裕があるらしく、なんべんも、なんべんも、網を隅から隅まで、なでまわしている。ルーバーで見ても精液は全く見られなかった。しかしここで面白い現象を見たのである。それは左の触肢を下すと、右の触肢を網の横側から伸ばして、空っぽの網の上を栓子を伸ばした触肢で、なんべんも網の上をかき回すのである。

しかしなんべんかき回しても精液を吸収することは出来ない。全く無駄なしぐさである。これはクモにとって本能的に行う動作であるかも知れない。これを見ていて私はかつて習ったことを思いだした。それは次のことである。「動物の本能による行動の中には、一見無駄と思われることも行うもの

である」ということであった。

雄はしばらくして精網を離れ、飼育箱の中を、ゆっくりと歩き回った。雌は雄からのがれるようにして隅にいたが、夜明けとともに隠れ場に隠れてしまった。結局雄は昼間隠れ場に入らず、ずうっと明るい所にいたのである。夕方7時頃に雌が隠れ場から出てくると、急に雄の活動が活発になって、第1歩脚を上下に動かして、雌の周囲を回り、時々近づいて、歩脚で雌の体をさわる。なんの反応もないと、離れてぐるぐると回る。このようなことをなんべんもくりかえした。その内に雌が体をぐうっともたげ、雄の行動に合わせるようになってきた。その瞬間、雄は雌の体に潜り込み、下側から抱きかかえてしまった。その敏捷さには驚いた。

雌は雄に抱きかかえられても、少しもさわがず、腰高の姿勢でじいっとしている。雄は体を雌の斜め横の方に移動させ、左側の触肢を伸ばして雌の生殖器に栓子を挿入した。すると雄の触肢の血のうが、いちじるしく膨張して、生殖球にある精液が雌の生殖口に注入された。4回血のうが膨張して精液を全部注入し終えて、栓子を雌の生殖器から抜いた。注入しはじめて、終るまでわずかに2・3分であった。

ここで私はまた驚くべき光景を見ることが出来た。それは、左側の触肢の精液のうけわたしの終了した後に、この雄は、空の右側の触肢を、雌の生殖器に近づけ、栓子を伸ばして生殖器に挿入したのを見たのである。しかし血のうの膨張もなく、2・3分ですぐ栓子を抜いてしまった。しかし私は本能の強さというようなものを見せてもらったような気がしたのである。

全く無意味に思える、このしぐさも、この雄にとっては、本能の発揮される時、その順序に従って行う動作の一つであるかも知れない。しかし見ている人間の側からすると、唯本能というものの力強さに打たれるのである。

雌は雌の体を第1歩脚で、何べんもなでるようにぬぐってやると雌も腰をさらに浮かせて、雄のなすまみにしている。しばらくすると、どちらからともなく、離れてそれぞれ箱の隅にいて静止した。これで交尾は終わったが、第2回目の交尾が何時行われるかを知るために観察をつづけたが、その日の内には見る事ができなかった。

翌朝（5月3日）飼育箱を見ると、雌雄とも昨夜いた場所に同じ姿勢で、じいっとしていた。それでクロゴキブリを与えてみたが、どちらも餌には関心を示さなかった。この日は全く動きがなく終日同じ所に静止していた。

5月4日の朝7時に雄を№1の自分の飼育箱に戻してやった。1匹になった雌は、腰を浮かし、歩脚をつぎつぎに使って、体を丹念にぬぐい、さらに歩脚を1本1本口にもっていつてきれいにしたのである。

この雌は日中で明るいにもかかわらず、クロゴキブリを追いかけ、捕えて食べてしまった。それでこの日から1日おきにクロゴキブリを1匹ずつ与えることにしたのである。

5月14日午後11時40分頃、雌が飼育箱のガラスの面に、歩脚を広げ、糸を出しつつ、ゆっくりと旋回しはじめた。同じ場所を第1歩脚から順送りに移動させるので、薄い糸の幕が円形に作られてゆく。それから20分経過すると、白い丈夫な糸の幕がガラスの上に作られ、雌はさらにこの幕の

上に、ふんわりとした糸を丁寧のせてゆく。この作業は産座の仕上げであって、約15分つづけられた。産座が出来あがると、その中央にどろどろと卵塊を産みおとした。この卵塊は空気にふれるとだんだん硬くなって、卵塊の中の1つ1つの卵がはっきりと見えるようになる。雌は卵塊がまだ固まる前に、腹部を押しつけて、卵塊を扁平な卵塊にしてしまった。この卵塊の上にふんわりとした糸をのせはじめたが、約15分すると卵塊は全く見えなくなってしまった。それから雌は最初に行った糸を出しつつ巡回運動を約25分間行った。白い円形の糸の幕が卵塊を被うように出来上って、卵塊は上と下の2枚の幕で包みこまれた。雌は触肢と歩脚でガラスの面の幕を剥がす作業をしはじめ、剥がすと上の幕と綴り合せ、扁平で円板状の卵のうを完全に作りあげた。雌はこの卵のうを触肢と第3歩脚でしっかりと抱きかかえ、飼育箱の金網の面の中央に歩脚を広げて静止した。6月の下旬に卵のうが部厚くなっているのに気付いた。これは卵のうの中で卵が孵化したことを示すものである。6月28日に雌は卵のうを抱くのをやめ、金網に糸でくっつけてしまった。雌は卵のうから少し離れた所に退いたが、やはり卵のうを守っているように見えた。5月15日の産卵から、子グモが卵のうを出る7月1日までの47日間、雌は絶食をつづけて、ひたすら卵のうを守り通したのである。卵のうから出てきた子グモは昨年同様飼育箱の全面に分散した。その当日は動きがにぶく、思い思いの格好で静止している。その様子はチリグモに似ている。子グモが動かない内に写真をとり、後で数を調べてみると300頭を超えていた。正確に数えることが出来ないのは、縦・横・天井・床という具合に、撮る間に子グモが移動するからである。

7月3日朝8時に二階のベランダに持って行って、昨年同様飼育箱の蓋を開けた。すると一斉に箱の縁から、腹部を空に向け糸を出し、その糸が風に流されると、すうっと子グモは風に吹かれ空に舞いあがって行った。約5分の間に300頭の子グモは全部分散してしまったのである。

雌は長い間絶食していたので、7月3日の午後7時にクロゴキブリを与えた。けれども翌日になっても餌を食べていなかった。それで7月4日にはオオクロバエを3匹与えた。すると私の見ている前でこの3匹のハエを捕食した。7月10日までこのオオクロバエを3匹ずつ与え、7月11日からはまたクロゴキブリを2日1匹の割りで与えた。雌は体力を回復し、飼育箱を盛んにかけ回るようになった。

7月20日の午後11時30分に、第2回目の産座を作りはじめ7月21日の午前0時10分に産卵した。卵のうを作りあげて、これを抱えこんで飼育箱の隅に静止したのは0時50分で、第1回目の産卵の時より動作が速く、卵のうも小さいようであった。この卵のうから子グモが出てきたのは、25日目の8月14日であった。第1回目では47日目に出てきたのであるから、第2回目は21日も期間が短いことになる。これは他のアシダカグモでも同じであった。7月から8月にかけて、気温が高いので、積算温度に関係があるものと考えたのである。また日照時間は第1回目の方が長いので、日照時間の長いということは卵期を遅延させる要因となるかも知れない。とにかく1回の交尾で、2回産卵し、そのいずれも受精卵で完全に2回とも子グモになり、空に分散していった。この雌は2回目の抱卵期間も絶食をつづけたのである。

8月16日から8月25日までは、オオクロバエの成虫を1日に3匹与え、それ以後は元のように

2日に1匹の割りでクロゴキブリを与えて飼育を続けた。9月24日に注意して飼育箱を見ると、食べ残しのクロゴキブリが5匹もいたので、9月25日からは餌を与えるのを止め、今までの食べ残しのクロゴキブリを全部、箱の外に出してやった。10月2日午前1時頃、このクモが、天井から2cmばかり糸を出して、それにぶらさがっているのを見た。これは脱皮だとわかったので、観察をつづけることにした。まず頭胸部の側縁部と後縁部が破れて、まだ軟らかい新しい頭胸部が、だらりと出てきた。それから第4歩脚の腿節が少し出てくると、その他の歩脚も徐々に出てくる。触肢は短いので、わりに早く殻から出てきた。8本の歩脚を殻から抜くのは時間のかかるもので、歩脚を上にして頭胸部がぶらんと垂れ下った格好で、宙づりになっている。腹部の今までの皮は、しわしわになって、まくれてゆくと、下から新しい腹部が出てきた。そうしてこの新しい腹部の端にある糸疣も、今までの皮がはがれて、その糸疣から支え糸が出ていたことも、はっきりと見ることが出来たのである。しばらくすると完全に殻からぬけ出して、この支え糸の先にぶら下がった。約10分間じっと下がっていたが、体が硬くなったのか、ゆるやかに動かしはじめた。そうして、糸疣より新しい糸を出し、静々と床に下りていった。脱皮の開始から床に下りるまで2時間余りかかった。これは第11回目の脱皮の時よりも、約30分も多く時間がかかったことになる。床に下りた雌は3分ぐらい、じっとしていたが、ゆっくりと飼育箱の中を歩き始めた。この第12回目の脱皮殻の頭胸部の長さを測定してみると、13.1mmあった。それで第11回の脱皮殻より第12回目の脱皮殻が0.8mm大きいことを知った。今回の脱皮も、直後から3日間は餌を与えても食べなかった。

10月4日から1日に1匹の割りでクロゴキブリの幼生を与えることにした。そうすると雌はよく食べてくれ、飼育箱内での活発な動きは、今までに見られないほどの元気さであった。

11月15日になると少し食欲の減退が見えてきた。それで3日に1匹の割りに与えることにした。

この時もクロゴキブリの初期の幼生を与えることにしたのである。12月10日頃までは食べてくれたが、それ以後は全く食べなくなったので、昨年と同じように発泡スチロールの板で包み、越冬の準備をし、10日に1度観察窓より、観察することにした。翌年2月15日にこのクモは隠れ場から出てきて、飼育箱内を盛んに動き回るので、オオクロバエの成虫を与えると直ちにこれを捕食してしまった。それでさらに2匹のオオクロバエを与えてやった。1匹はその日の中に食べたが、残りの1匹はそれより3日後まで箱の中で生存していたが、その翌日ハエは死んでいた。3月に入って動きが出てきたので、1日に1匹の割りで、オオクロバエの成虫を与えてやったが、食べ残しがかなり出た。やはり本格的に食欲が出たのは4月に入ってからであった。4月1日にはクロゴキブリの成体を1匹与えると、すばやく捕食してしまった。それでこれ以後は3日1匹の割りでクロゴキブリの成体を餌として与えてやったのである。4年目の1年間にこのクモは1回交尾を行い、2回産卵をし、第12回目の脱皮を行ったのである。

民話における蜘蛛の存在価値

貞 元 己 良

蜘蛛は古くから魔物扱いにされ、民話・昔話・俚諺その他芝居・映画・小説などにしばしば登場し決して善人の役についたこともなければ、美を讃えられる対象となつたこともない。一見グロテスクなイメージが種々の伝承にからみ、結局人間が蜘蛛という動物を悪者に仕立ててしまったのである。

そして現在にいたっても、その容姿の気味悪さから害虫というレッテルをはられ、人々に嫌われる運命をになっている。

私はこの蜘蛛という生物に興味を持ち、趣味として自然科学の観点から研究を始め今年でちょうど10年になる。そこで大学時代に卒論で扱った論文のなかより、一部を抜粋してここに掲げ、私の研究範囲の新たなステップにしたいと考えたのである。

蜘蛛は古くから水界の霊、もしくは水の神の使わしめとする信仰があり、神聖な動物、あるいは神意をうかがう動物としてあつかわれ、朝蜘蛛が巣を張ると天気が良いなどという天象の占いや、夜蜘蛛を嫌う俗信、あるいは九州地方に残っている蜘蛛占いなどからもそのことがうかがわれ、蜘蛛の予兆能力を認める民間伝承は今も多い。

しかし蜘蛛に関する伝承には、その形態や巣をかける習性、あるいは毒液の分泌などからくる無気味さと、神意をうかがう聖なる動物への畏敬の念とが重なりあって、一面において朝蜘蛛を吉兆とし、反面夜蜘蛛を凶兆とみる二面的なものや、あるいはその逆、または両方良い、もしくは悪いと考えるむきが多々見られ、いちがいに決定されるものはないのである。

私はこの様なことから、蜘蛛にまつわる民間伝承及び民話と俚諺との相対的な結びつきについて、信仰と俗信の両面から調査研究し、文学における蜘蛛の存在を追求したいと考えた。

そこでまず、全体を大きく三つに分けた。

第一に、蜘蛛を神聖な動物と考え、蜘蛛への信仰を持った伝承と民話について。

第二に、蜘蛛を魔物扱いに仕立てあげた俗信について。

第三に、蜘蛛の神聖さを一部では認めていながらも怪異性の方が強くなった、信仰及び俗信の両面を持つ民話伝承について。

——である。また、それぞれの話について俚諺や教訓なども含めながら、これらを考えて行く。

さて第一の蜘蛛を神聖な動物と考え、蜘蛛への信仰を持った伝承と民話について、であるが。山口県のある魚村では、魚民にとって漁業神としての蜘蛛に対する信仰が強く、次の様な伝承が残っている。

昔、蜘蛛が楠の葉をまいて脚をかい櫃にして海を漕いでいた。それから人間が暗示を得て、楠を伐り中をくりぬいて櫃で漕ぎ舟を造った。舟の始まりはこれであるという。

それで普通は夜蜘蛛は嫌われるが、ここでは夜出て来た蜘蛛でも絶対に殺さず、「蜘蛛様、蜘蛛

様」と言って非常に尊み、船乗りはどんなことがあっても蜘蛛を殺すものではないという。それでこの地方の諺には「蜘蛛は運立ちが良い」というのが残っており、漁民達にとって縁起をかつぐ動物であるとともに、水霊の神としてあがめているのである。しかし単に水霊の神といっても、水そのものだけをさすのではなく、この場合の様に舟の神をさす例もある。

民話では、どうであろうか。蜘蛛を神聖な動物と考えるなら、水界の霊としての蜘蛛が登場し人間に対してなんらかの利益をもたらすのではないだろうか。いろいろと文献を調べてみたが二例だけ見つけることができた。

弘前地方（津軽）「蜘蛛の恩返し」

那須・塩谷地方（栃木）「蜘蛛の綾織」

— であるが、この二例とも話の筋はほとんど同一のものである。話しは次の通り。

蜘蛛の綾織

^{みやこ}昔、京に正直で貧乏な男がいた。

ある雨の日、琵琶湖のほとりを通りかかると、一匹の大蜘蛛が渦に巻きこまれもがき苦しんでいた。

男はその大蜘蛛を水から引き揚げ、助けだしてやる。

それからしばらくたったある嵐の夜、弱り果てた声を出して、宿を乞う女があった。男は、かわいそうになって、戸を開けてやると、びしょぬれの女が風に吹きこまれるようにしてはいってきて倒れてしまう。

やがて2日たち、3日たつうちに、男の親切な介抱によって女は健康を回復して行くが、いっこうに立ち去る様子がない。

女はあやという名だった。女は男に対し、はたを織ってお礼がしたいと申し出る。ただしはた織の最中には、けっしてのぞいてはいけないと、男に固く約束させる。

それから毎日、部屋にこもってはたを織るが、そのできばえの素晴らしさに京ではひっぱりだこになった。

利にさとい商人たちは、男の家に集まり、ひとつ織りあがるごとに競って買いとっていった。おかげで男は、たちまち大金持になってしまう。

男は次第に、女をよそへはやりたくなくなり、自分の女房にしておもうと考える。そして男は女を女房にするが、金に目がくらみ、欲も深くなり、むかしのような純情さはすっかり失い、朝早くから夜遅くまで女にはたを織らせるのだった。

女房はだんだんやつれてきたが、決していやな顔ひとつ見せず、まめやかに働いた。しかし、さすがに疲れるのか、ときおり、手を休めて、昼寝をするようになった。

男は、すこしでもはた織りの手を休まれてはもったいないと思い、決して見てはいけない、という約束を破りのぞいてしまう。

男は、おどろいて腰をぬかす。そこには大きな蜘蛛がぐったりとして眠っていたのである。

悲鳴を聞いて人々がかけつけてきたが、はた織りの部屋には、女も蜘蛛も姿はなく途中で織りかかった綾と、そこに歌を書いた紙片があるだけだった。

恋しくばたずねて来たれ下野の

那須のことやのあやおりが池

こんなことがあってから、男はやっと正気づき、日がたつにつれ、あれほど自分につくしてくれた魔性の女房に対し悔恨の念を持つようになった。

男は女房に会うため、京からはるばる下野へ行き、女房の指定したあやおりが池へ向う。

男がそこへたどりつくと、池のほとりで女房が待っており、そして泣きくずれながら、「私はこの池にむかしから住んでいる主です。人間と類をへだつといいながら、前の世からの約束ごとによってあなたの妻となりました。しかしその縁もつきて、ここに帰ってきたのです。あなたと今を限りに、永遠にお別れしなければなりません」といって、別れを惜しみながら池の中へ、はいってしまふ。男は、自分が蜘蛛になってもよいから女のところへ連れて行ってくれ、と声を限りに、日が暮れても叫びつづけたが、その悲しい叫び声は、いたずらにこだまして帰ってくるだけだった。

男はぐったり力つき、放心したようになって、泣く泣く京へ帰って行った。

この民話は、完全に蜘蛛を水界の霊と考えて作られている。物語の展開としては、その着想が中世の文学によく見られる仏教伝来の神がかり的な発想、いわゆる前世の因縁たるものが物語の頂点を極めている。この物語に出てくる蜘蛛は、動物としての蜘蛛である部分とあやおりが池という池の主である部分とに分けられる。仏教では、人間は七代生まれ変るといふ、人間が俗世界を越えた存在として神をあがめ、恐れおののいていた一種の信仰に、俗世界である現世の人間が最も身近にかかわって行き、人間のおろかさや神への尊さを強く強調した信仰的思想表現であり、人間の欲の戒めと神への信仰心をたきたてるため、親から子へ子から孫へ伝承して行く物語なのである。

この論文を書くにあたり、序文にも注意書きをしておいたが、私は文学の世界に観る蜘蛛の存在を調べ考えて行こうとしたのではなく、蜘蛛が動物（生物的）としてどのような存在価値で文学に関与し、活用されていったかを解明したいと考えたのが動機になっているのである。

この意味において前記の民話を考察すると池の主つまり水界の霊は、蜘蛛でなくても良かったのではないだろうかという疑問が浮んでくるのである。日本昔話には、動物が命を助けてもらった恩返しに、はたを織って人間の生活を豊かにしてやるという物語が「鶴の恩返し」などで有名であるし、池の主が蛇や竜・河童などといったたぐいの話の方が多く民話の中でも、一般的になっている。しかしこの「蜘蛛の綾織」は、一つの物語の中に恩返しと神がかり的な発想、つまり水界の霊への信仰心とが同居しており、日本昔話にはない当時の思想がもりこまれている。

当時の人々も早くから蜘蛛の造網技術には関心を持っており、きっと動物の中ではた織りなどやらせたら、あの芸術的ともいえる糸の組模様を何の造作もなくきれいに空間に張ってしまう蜘蛛が一番うまいだろうと、考えていたかもしれない。鶴がはたを織るより、蜘蛛がはたを織った方がより写実的に納得できるのである。

「蜘蛛の綾織」はその物語の展開から考えて、人間界へ来て蜘蛛の姿ではた織りをする描写は、動物としての蜘蛛の存在と造網技術の神秘さを認めており、日本書記「わがせこがくべきよひなりささがねのくものおこないこよひしるしも」・古今集「今しはと忤びにしものをささがにの衣にかかりわれをたのむる」などよりは、より存在価値は高いのである。後半の部分は、人間の姿に置き変えた魔物・水界の霊・神などの象徴として信仰性のあるものを表わし、そこには動物としての蜘蛛の存在はなく、物語の筋、話しのつながりからいって池の主は蜘蛛であったとする暗示がうかがえるのである。

第二は蜘蛛についての俗信、いわゆる信仰とは全く無縁に魔物として扱った話であるが、諺には朝の蜘蛛と結びつけて「朝の蜘蛛は福がくる、夜の蜘蛛は盗人がくる」と表現しており、意味は朝蜘蛛を見たら、その日は何かいいことがあるから殺してはならぬが、夜の蜘蛛は泥棒の前触れだから必ず殺してしまえという俗信で、別に科学的な根拠はないのである。

しかし、このような諺が現実には昔から語りつがれて来た以上、なんらかの根拠、理由があったはずである。それを調べるために、私はとりあえず民話の伝承を考えてみた。民話は、親から子へ子から孫へ伝わっていった一種のしつけのようなものであり、物語を通して一つの教訓を後世へ伝えるものであったと考えられる。この意味において朝蜘蛛夜蜘蛛云々は、これに該当しむしろ民話のようなものから発生した諺と思われるのである。

朝蜘蛛夜蜘蛛云々について民話においては、徹底して夜の蜘蛛は悪いと決めつけられており、物語も一つの筋から各地方へ伝わりそれにつれ登場人物名・言葉の表現・描写の仕方等がその地域の習慣に反映し少しずつ変化しながら発展したものと思われるのである。私が調べあげただけでも八つの民話を発見することができた。

駿河地方「夜の蜘蛛」

阿波西地方「夜の蜘蛛」

秩父地方（埼玉）「食わず女房」

因幡地方（鳥取）「食わず女房」

石西地方（石見）「くも女房」

土長地方（土佐）「えんこう女房」

筑豊地域（福岡）「蜘蛛の女房」

伊万里地方（佐賀）「食わず女房」

—である。そしてこれらいくつかの物語の最後には、諺に結びつくような教訓が記されており「朝蜘蛛は吉相だから殺してはいけない、夜の蜘蛛は人をとるから殺さなければいけない」や、「朝の蜘蛛は福になるが、夜の蜘蛛は親に似ていても殺せ」・「夜の蜘蛛は親に似ても殺せ、朝の蜘蛛は仇に似ても逃がせ」などが見られるのである。

では、これら民話の中より一つ、秩父地方の「食わず女房」を引用してみる。

食わず女房（あらすじ）

むかし、ある所にひとりの男があった。

この男は大変けちな男で、嫁をもらうと、飯を食べさせなければならないので、嫁はもらわなかった。しかし、いつも、世の中に飯を食べない嫁はいないものか、と言っていた。

ある日、この男の所へひとりの女がやって来た。見ると口が無かった。女は、自分は飯は食べないそしてよく働くから女房にしてくれと、頼む。

男は自分の女房には最適だと考え、さっそく口の無い女を、女房にする。

次の日より、女房は朝早くから起きて、男の食事を作り、そして送り出し、男が帰ってくれば、ふろをわかし、晩飯を用意した。

だが、このけちな男も、いく日か過ぎると不審に思うようになってくる。

そこで男は朝、仕事に出かけるふりをして、こっそり天井にのぼり、女の様子を見ていた。

しばらくして、女は、かまどに大釜をかけると、俵から30人前ほどの米を出してその中に入れ、飯をたきはじめた。飯がたき終ると、女は、髪の毛をほどいて、毛をくしで左右に分けた。男は思わず「あッ！」と叫びそうになる。女の頭の上には、大きな口がひらいていたのだ。

女は、大きなしゃもじで、大釜の飯をすくっては、頭の中へほうりこんでいった。そして、ひとつぶ残らず食ってしまうと、またもとのように髪の毛をゆって、なにくわぬ顔で、すましていた。

夕方男は、そしらぬ顔で家に帰り、ふろにはいりながら、思案に考えていると、突然ふろのふたをかぶせられてしまう。そのうち女は縄でふろ桶をしぼり、太い丸太をとおしてかつぎあげ、うらの山へと登っていった。

途中で女が一休みしている間に、男はすきを見て、そっとぬけ出し近くの木に登ってかくれていた。

女は、立ちあがり、またふろ桶をかつぎ、山の中へ消えて行く。男は、恐さにふるえながら女の後をつけていった。

山の上には大きな岩あながあり、女はその中へはいって行く。女は、仲間の蜘蛛達の前で、ふろ桶のふたを取るが、中がからになっているのに気づき、うなり声をあげて、くやしがる。そして、「今夜こそ、蜘蛛になって、きつとつかまえに来てやる」と叫ぶのだった。

男は、ふるえながら家まで逃げ帰ると、近所の人々に助けを求める。

夜中、あたりがすっかり静まりかえった時、いろいろの灰が、むくむくと動きだし、蜘蛛が現われる。

近所の人々は、それッとはばかりに焼け火ばしや竹やりで、灰の中から現われた大きな蜘蛛を退治したのであった。

この物語に限らず他の七つの民話にも該当することで、夜の蜘蛛が悪とする伝承は納得行くのであるが、朝の蜘蛛が善であるということに関して納得できるような事情などを、記述しているものは一つもないのである。それでは朝の蜘蛛云々という諺は、どこから出てくるのであろうか。単に夜の蜘蛛が悪いということを強調するために、善と対比させてかかげられた事柄だったのであろうか。いろいろと他の民話も調べてはみたが、それを見いだす伝承は一つも出てこなかったことをつけ加えてお

く。

九州のある地方において、言語学的に蜘蛛はクモでなくコブという方言で呼ばれている。その地方の人々は、蜘蛛を見ると「蜘蛛は喜^{コブ}に通じるから決して殺してはいけない」と言って大変縁起の良い動物として考えている。つまり九州においては、単に語呂合せが良いという面から蜘蛛に福を持たせているのである。

そこで私は、もう一度朝蜘蛛夜蜘蛛云々という諺の出現した民話を調べてみた。すると大変興味深いことがわかるのである。

それは、本州における俗信としての蜘蛛の民話駿河地方「夜の蜘蛛」阿波西地方「夜の蜘蛛」秩父地方「食わず女房」因幡地方「食わず女房」石西地方「くも女房」においては物語の教訓として、かけられている事項に朝蜘蛛云々という記述は全く見あたらないのである。つまりこれは本州における民話の伝承の中では、夜の蜘蛛は悪いもしくは殺せということだけが教訓として諺化したものであり、朝蜘蛛云々ということは民話が各地方特に南へ伝わって行くにつれ発生した後天的なものと考えられるのである。

九州・四国地方の民話土佐地方「えんこう女房」筑豊地域「蜘蛛の女房」伊万里地方「食わず女房」において、はじめて教訓の中に朝蜘蛛云々という記述が登場してくる。九州・四国地方の、蜘蛛が福を呼ぶ動物と考えられていた地域にとって、本州から伝わってきた蜘蛛を魔物的動物と考えた伝承は、各地域各村落にはそのまま素直に受け入れられることはなかったのである。

例えば四国土佐の民話「えんこう女房」については、ほとんど物語の筋が本州の「食わず女房」、「蜘蛛女房」と同じものであるのに、物語の最後で蜘蛛を退治した後、村の長老が「あれはえんこう（河童）だったのだ」と、さももっともらしいことを言ってお蜘蛛の存在を無視する表現で打消しているのである。同じように九州地方の民話筑豊（福岡）「蜘蛛の女房」伊万里（佐賀）「食わず女房」においても、本州の民話の筋とほぼ同一であるのに教訓として朝蜘蛛福、夜蜘蛛悪が出てくるのである。

つまり、今までに述べて来た事を総合すると、もともと蜘蛛を俗信と結びつけた考えの「食わず女房」「蜘蛛女房」は本州の一部で発生したもので、それが徐々に村落同士の交易などで各地へ伝わり、それが南へ伝わって行くにつれその地方独特の蜘蛛に対する考え方が混同し、物語も少しずつ結末が変化したり又は、蜘蛛を悪者とだけに扱う表現を素直に受け入れなかった姿勢とがみられるのである。本州における俗信としての蜘蛛の物語は、単に話しの展開から考えて夜の蜘蛛は殺せであるのに対し、九州・四国地方の同じ蜘蛛の物語は、民間において動物としての蜘蛛に対する有益な思想がもともと存在していたため、夜の蜘蛛以外のつまり朝とか昼とかの蜘蛛にも、蜘蛛という生き物を見直す意味で夜の蜘蛛に対比させて、朝の蜘蛛は福になるので決して殺してはいけないという教訓が生まれたのである。

九州・四国地方の民間伝承に蜘蛛が悪者として登場する話しがほとんど無いのは、一部において蜘蛛に対する信仰心もあったかもしれないが、やはり蜘蛛は喜^{コブ}で語呂の良さからひっかけた言葉が土地の人々には一般的なものになっており、この意味において九州・四国地方における多くの村落の

人々は、蜘蛛を一方的に攻撃するような話しを簡単には受け入れず、ほとんどの地域でこの物語を無視したので現在あまり残っていないのであろう。

蜘蛛の動物としての存在価値については、結論から先に述べると、価値は非常に高いと思われる。蜘蛛という動物にはもともと水界の霊とか、水の神の使わしめとかいう神がかり的な信仰があり、現在の信仰と違って神もしくは神の使いは当時の人々にとって恐れおののき、あがめ奉る存在であったわけであるが、時が進行するにつれいつのまにか恐れおののきが単なる恐怖心になり、蜘蛛そのものに関してもその姿・形の悪さや、毒液を分泌する等の理由から怪異性が表面化し、それがいわゆる俗信となって、民間伝承にも表われてきたのである。で、あるから動物としての蜘蛛の存在とともに過大評価された蜘蛛の怪異的な無気味さを鋭く表現した民話は、非常に価値の高いものと考えられるのである。

ただ一部の民話、駿河地方「夜の蜘蛛」・阿波西地方「夜の蜘蛛」には、蜘蛛が人間に化けたのではなくタヌキや山姥が人間に化けてけちな男の女房になり、風呂桶ごと山へ持って行き食べてしまおうとしたのが失敗し、夜、蜘蛛に化けて人間を襲おうとくわだてるが、逆に殺されてしまうという話しになっており、蜘蛛の存在価値としての重要性には乏しいと思われるが、基本的には「食わず女房」などと同じ部類である。

やはりこの様な話しには、南へ行くほど、諺に変化が生じたように、各土地々々において蜘蛛に取って変わる無気味な怪異の生き物の存在が人々の心に根強く残っており、物語の伝承にも多少の影響と変化が生まれても、不思議ではない事であろう。

他にも蜘蛛の怪異性を大きくクローズ・アップした民話はある。それは飛騨の民話で「娘と大蜘蛛」という話しである。簡単に概要を説明すると、

昔、あるところに幾代も続いた長者があった。その家には、家が建てられた時から1匹の蜘蛛が住みついていた。蜘蛛は年を経て、大変大きな古蜘蛛に変っていた。

ある日、この家でお産があった。普通お産は、かたく閉ざした部屋で行うものであったが、この時は少し戸が開いていた。蜘蛛は、そのすき間から中の様子をうかがい、生まれ出た女の赤子を将来自分の嫁にしようとする。

娘が、年頃になったある日、娘の前に美しい男が現われる。娘は男と恋に落ち、男は娘を連れ去ってしまう。

家の者は、大騒ぎし、易者を頼って娘を探し出し、助けようとするが、娘の話しから娘を連れ出した男は、人間でないことを知り、思案する。

そこで、易者の知恵を借り、娘に風呂を沸かさせ、どこからともなく帰って来た男に、娘は愛想をふりまき風呂に入るよう勧める。男は、娘の機嫌が良いのに気を良くし、勧められた風呂に入る。

そして、すきをみて、隠れていた長者の家の者たちが、風呂にふたをして、下からどんどん薪をくべて、火を起す。

しばらくして、ふたを開けてみると、そこには風呂桶いっぱい大きな蜘蛛が死んでいたという。
— である。

そして、この物語は最後に教訓として、「お産部屋は、かたく閉めておくものだ」と結んでいる。この教訓は諺化して、現在も残っているだろうと私は考え、いろいろと資料を参照してみたが、いずれにも載ってはいなかった。

つまり、これがどういうことを意味するかといえば、この「お産部屋は、かたく閉めておくものだ」という教訓は諺化しなかったものなのか、それとも諺化はしたとしても、この民話が伝承した地方にだけ存在した俚諺であり、時代の流れとともに消滅してしまったものだったのであろうか。

それを追求することは、今、私の持つ資料では不足であり、調べることは不可能である。この問題は別の機会に、保留する。

第三に、蜘蛛がもともと持っていた神聖さを一部において、認める形式を取っていないながらも、怪異性の方が強く前面に押し出された形を持つ物語、つまり信仰及び俗信の両面の性質を保つ、民間伝承についてであるが。

蜘蛛は古くから水界の霊、もしくは水の神の使わしめとする信仰があり、この手の話しには、だいたい水が関係しており、人間を水に引き込み命を取ってしまうというストーリーの展開は、どこの地方でもほとんど同じである。作品は次の通り。

甲斐地方「蜘蛛洩」

中毛地方「蜘蛛に化けたカッパ」

北伊豆地方「浄蓮の滝の女郎蜘蛛」

古城地域「藪洩の大蜘蛛」

摂津地方「蜘蛛の糸」

播磨地方「蜘蛛の滝」

阿波北地方「人ひき蜘蛛」

— 以上の七つである。

この内一つ、北伊豆地方の「浄蓮の滝の女郎蜘蛛」を紹介してみたいと思う。この伝説は、この北伊豆地方においてかなり広域にわたり分布しており、その土地によってそれぞれかなり多くの脚色がみられ、細かい部分はほとんど違っていて、どれが本当の伝承か、今となっては全く分からなくなっているが、大筋は共通しているようである。そこで、いくつかの物語から公約数的なものを考えて、荒筋を書いてみる。

浄蓮の滝の女郎蜘蛛

昔、与市という木こりが山奥深く、浄蓮の滝の近くで斧をふるっていた。

疲れたので、斧の手を休め滝を眺めながら、腰を下ろした。すると、どこから来たのか1匹の女郎蜘蛛が現われ、木こりの足に糸をまきつけ、滝の方へ下りていった。蜘蛛は根気よく、それを繰返すので、与市は糸をふみ破ってしまうのもあわれと考えて、そっと足から糸を外しそばの切株にかけてやった。

そのとたん、一大音響とともにこの切株は引っこぬかれ、蜘蛛の糸にひかれて、すさまじい音と
いっしょに、浄蓮の滝壺めがけて落ちこんでいった。

このことがあってから、浄蓮の滝の主は女郎蜘蛛であるといううわさが広がり、誰もこのあたり
には近づかなくなった。

何年かすぎた後、遠い他国からやって来た木こりが、うわさを知らずに、浄蓮の森へ入り、みご
とな古木に目をつけて斧をふるっていた。しかし木こりは、ふと手をすべらせて斧を滝壺に落して
しまう。木こりが滝のほとりへ下りて、途方にくれていると、忽然として美しい女が滝壺に姿を現
わす。その手には木こりの斧が、握られていた。女は「あなたの落した斧は返します。そのかわり、
今日のことを決して人には言ってはなりません。もし他言すれば、その時こそ、あなたの命はもら
います。私は浄蓮の主の女郎蜘蛛——」といい終るや否や、姿を消してしまう。

木こりはその後、女から聞いたことばを固く守って、誰にもそのことは話さなかった。ところが
ある日、ある酒宴の席に彼は招かれた。酔がまわるにつれて、ついあの日の不思議な出来事を同席
の人々にもらしたのである。話しが終るや、彼はごろりと横になりふと気がつく。——これを話す
と命をもらうと言っていたが——やがて大きないびきが聞こえ、それも聞こえなくなると、木こり
は息を引きとっていた。

——というのである。

この「浄蓮の滝の女郎蜘蛛」と似た伝説は各地にあるようで、大い滝や淵のある場所に限られて
いる。ただ物語の中で実際に人間が殺されてしまう描写があるのは、この「浄蓮の滝の女郎蜘蛛」だ
けである。

蜘蛛が水界の霊、水の神の使われしめとする信仰などから決まって滝や淵のいわゆる流れの激しいと
ころより、蜘蛛の出現する発想がある。これは滝の流れ落ちる様子や、淵の流れの速さなどからくる
水しぶき等が、蜘蛛の糸を連想させるからであろう。

他にも、おもしろい話がある。

但馬地方「^{はたおり}機織 淵」

である。この話は、うっかり斧を淵へ落してしまった木こりが、あわてて斧の後を追って淵に飛び
こむ。するとそこは竜宮であり、美しいお姫様が^{はた}機を織っていたという。この木こりは、自分が貧し
いことをお姫様に話し、お姫様より何でも願ひ事のかなう糸巻をもらって帰る。木こりは、それを使
ってぜいたくな生活をするが、あまり欲ばりすぎてその糸巻は、ただの糸巻になってしまったという
のである。

この話しなど、全く蜘蛛の登場はないものの、水に関係する淵・機を織る女・魔力のある糸巻など
から蜘蛛の存在がうかがえ、前記の蜘蛛への信仰からくる伝承と遠からずかわかりがあるとみられ、
信仰とは別にいろいろな物語をミックスしたような感がある。

蜘蛛の動物としての存在価値であるが、他のいろいろな蜘蛛の登場する民話伝説は、蜘蛛そのもの
の描写を単に「1匹の蜘蛛」とか「大きな蜘蛛」という言葉で表現しているのだが、信仰と俗信の両
面の性質を持つ民話のいくつかは、具体的に「女郎蜘蛛」とか「糸を巻きつける」といった表現で、

きわめて正確に描写しており、全体の流れを無視して蜘蛛の登場している場面だけをとりあげてみると、そこに描かれた蜘蛛は、完全に動物としての蜘蛛の存在である。しかし物語は、蜘蛛が人間を水へ引きこもうとする話であり、そこには化物としての蜘蛛でしかないのであるが、話しの展開から考えて、この物語には蜘蛛の存在が最も不可欠なのである。

要するに、蜘蛛が人間を水に引き込む話もしくは蜘蛛と水を結びつけて人間がどのようにかわって行くか、という話は、蜘蛛がいかなる形で表現・描写されようとも、物語全体に多大な影響を及ぼす結果となり、蜘蛛の物語における存在価値は高いということである。

第三の信仰と俗信の両面を持つ蜘蛛の民話伝説には、俚諺らしきものはうかがえない。信仰的でもないければ、俗信的でもない物語に、教訓など必要はなく、単なる物語のおもしろさを伝え聞く人々が鑑賞しただけのものでしかなかったのであろう。

ま と め

民話伝承におけるところの蜘蛛の存在は、全体を通してみると、動物としての蜘蛛はあまり尊重されておらず、信仰・俗信・その両面性の三つに分けた話を考察しても、実際の、生き物としての蜘蛛とは別に、観念の世界でのみ創像された蜘蛛が主流をなしており、創作された物語の中の動物の存在価値は、それが生き物としてどうのこうのということではなく、その物語全体にかかってくるような影響を持つ描写でなければ高い価値とはいえないのである。

この意味において、第一の蜘蛛に対する信仰心からくる伝承と、第三の信仰と俗信の両面の性質を持つ伝承は、非常に蜘蛛の存在価値は高いのである。しかし第二の俗信としての蜘蛛の伝承は、動物としての蜘蛛と怪異性としての蜘蛛がうまく表現されてはいるが、物語の展開から考察すると、動物としての価値は高いが、物語そのものに影響を与えるものとしては存在が薄いのである。それだから同じような民話の中にも、蜘蛛が山姥になったり、タヌキになったり、河童になったりといったいろいろなものに置きかえられても、物語の大筋にはほとんど影響がないのである。

蜘蛛に関する民話の発生と伝承は、蜘蛛に対する一種の信仰心より始まり、信仰と怪異性からくる俗信との混合があらわれ、その後信仰心がほとんど影をひそめ、俗信としての蜘蛛の登場する話しがつとてかわったとみるのが一番妥当な線であろう。

しかし私はこの論文を書くにあたり、信仰にかかわる物語と、怪異性を重んじた俗信としての物語を対比させる意味で、あえて民話伝承の変遷にさからい、信仰と俗信の両面の性格を持つ物語を最後に持ってきて全体をまとめあげてみたことを、つけ加えて説明しておく。

卵ノウ 2 種の 観 察

佐 藤 幸 子

ヤマシログモ

1980年9月7日 神武寺（三浦半島）境内の萬年^{おもと}青の葉の中に、産卵したばかりらしいマツ白な卵ノウを抱えたヤマシログモを見つけた。その卵ノウがどの様に変化してゆくか、又それにつれての親の行動を観察しようと思い、家に持ち帰った。（気温29℃）

○親グモの体長3.8mm ○卵ノウ直径3.3mm ○卵ノウの色と形、白色球形 ○卵色、淡黄色

(1) 卵ノウ

○卵は球形にまとめられ、その上からマツ白な糸でしっかりと包まれている。しかし、フ化が始まる頃になると卵ノウの糸はだんだんと変ってゆき、ぼろ糸をからめた様になる。そして粗くよられた様に変化した糸のすき間から、内部の様子が丸みえになる。したがってフ化した子グモが卵ノウへ出るのは、たやすい事である。

卵ノウの内でフ化が始まると、白かった卵ノウの色が少しづつ変わり、球形がだんだんゆがんで来て、全個体フ化の頃はグズグズになり、子グモ達が立去った後は『くす玉』の様に半分に割れていた。

○卵のフ化は全個体同時ではなく、かなりのバラツキがある。最初にフ化した個体と最後にフ化した個体の差は9日であった。よって、卵ノウ内で脱皮をし、卵ノウの外へ出るのにもマチマチである。（39個体総てフ化）卵ノウを開けて見なかったので、卵直径も1令2令の体長も不明である。

(2) 親の卵ノウ保護

親は卵ノウを糸疣につけ、その上触手でピッタリとおさえているので、卵ノウをかかえこんだ身体は『くの字』に曲っている。常時この苦しそうな格好で歩いているが、時には卵ノウが腹部から離れて見える事がある。しかし糸疣からは細い糸が卵ノウにつながっていて、決して離れてはいない。時々左右の第3歩脚で卵ノウをおさえる。

卵ノウの内部に変化があり、色が淡紫褐色になって球形がグズグズにゆがんで来ても、親は卵ノウを糸疣につけたまましっかりと口器にくわえ、触手でおさえており、一生懸命抱えているのがわかる。それがとうとう巣立ちの時をむかえ、卵ノウから出て来た子グモ達が卵ノウの外側にとりついたり、卵ノウの中でゴソゴソ動き廻ると、親グモはこの卵ノウをどの様に守って良いかわからず、下に置いたり、触手で子グモ達をしきりにさわったり、又触手と左右の第2歩脚と左第3歩脚で、グズグズになった卵ノウを抱えて、よいしょ！と持ち上げたりしてまったく途方に暮れているのである。

全個体卵ノウから出る頃、親は始めて卵ノウを離す。そしてゆっくりゆっくり卵ノウを中心に、糸を四方八方に張りわたす。まどいをしやすい様にとの心配りであろうか。そして時々

卵ノウに近寄り、その辺に散っている子グモを触手でたしかめる。

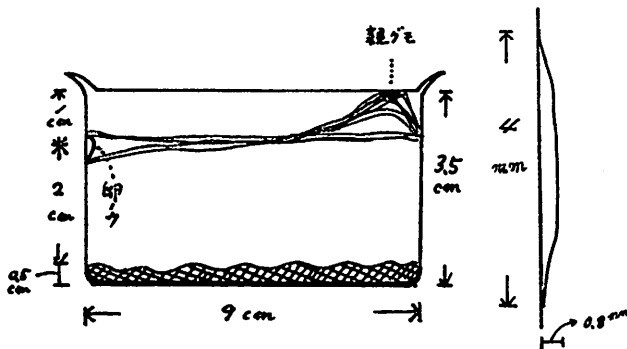
その翌日の事、親グモが子供達からチョツと離れているので、餌をやってみようと別の容器にうつした。(家に来てから今日まで何もたべていない)すると彼女はしきりに子供達をさがし求めるという様子なので、可哀想で見えられなくなり、子グモの容器にもどした。親グモは子供達の群の内に走りこみ、左右の第1・第2歩脚でしきりに1匹1匹をたしかめていたが、しばらくして心が落着いたのか、子グモの集団のまん中に出て動かなくなった。

(9月24日。新海栄一氏宅にこのクモを持参し、今後の飼育を依頼した)

ツメケシグモ

1980年8月29日 我が家(横浜市港南区)の南向の庭から、お腹の大きいこのクモを見つけた。それでどんな卵ノウを作るかを観察することにした。体長は1.6mm。住居は(図1)のとおり。

8月31日 産卵 容器側面地表より2cm上部(室温 27℃)



(図1)

卵ノウ 白色。直径4mm。厚み0.8mm。

(図2)

円形で全体的にやわらかい感じ。卵はフワフワの糸で保護されている。非常に弾力性があり、まるで餅のように良く伸びる糸であった。

卵色 黄色。卵数 8個。0.4mm

9月5日 全個体フ化 0.5mm。(1令)

9月7日 脱皮 0.6mm。(2令)

(図2) 9月8日 分散

親グモは、地表より2cmの空間に糸を張りわたし(シート網)卵は本住居より離れた場所に産卵される。産卵後親は卵ノウより離れているが始終気になるらしく、折にふれては卵ノウのそばにやってきて、卵ノウの附近にチョイと糸を掛けては去って行く。今まで観察したサラグモの中で、このような行動を見るのは初めてである。

親も小さいが、子グモはもっと小さいので(小さすぎるので)、庭に帰してやった。

赤城山の真正蜘蛛類

林 俊 夫 A list of the Spiders from Mt. Akagi
Toshio Hayashi

赤城山の真正クモに関する正確な記録を最初に報じたのは、植村(1961)で、ヤエノオニグモ1種を報じている。その後、最近になって林・斉藤(1980)によって赤城山大洞付近のクモ79種の採集記録が報告されている。また斉藤(1980)によって *Tapinocyba silvicultrix* (ヤマジコナグモ) と *T. oiwa* (オオイワヤマジコナグモ) の2種類が新種記載されたが、前種は赤城山の♂が模式種となっている。

東京談話会では、1981年8月7日から9日まで、恒例の夏季合宿を群馬県の赤城山において行ない21科119種のクモを採集できたので全種のリストを発表したい。

今回も、3日間という短い期間であったが、600m, 1,000m, 1,300m, 1,400m, 1,600mの5地点を調査することができた。各地点での調査が綿密に行なわれたわけではないが、この時期に目につく一般種は一応、採集されていると思われる。

採集者(敬称略): 小沢実樹, 佐藤幸子, 新海栄一, 松本誠治, 長島忠義, 高橋登, 池田博明,
佐々木勝実, 松浦祐司, 鈴木勝浩, 貞元己良, 林俊夫

目 録

○採集観察地域及び年月日

- A: 600m 宮城村三夜沢 赤城神社 9-VIII-1981
B: 1,000m 富士見村箕輪 7・8-VIII-1981 (8日夜間)
C: 1,300m 富士見村赤城山 大洞(大沼, 覚満湖, 赤城神社) 7・8-VIII-1981
D: 1,400m 富士見村赤城山 小沼周辺 8-VIII-1981
E: 1,600m 富士見村赤城山 地藏岳山頂 8-VIII-1981

○地点別種類一覧表

- ・属および種の配列は「日本産真正蜘蛛類目録」(八木沼・1977)によった。
- ・地点別一覧表は、左からA(600m), B(1,000m), C(1,300m), D(1,400m), E(1,600m)の順に並べてある。()内は標高を示す。
- ・○印は群馬県新記録種

(1) Antrodiaetidae

- ① *Antrodiaetus roretzi* カネコトタテグモ

A B C D E

○

(2) Ctenizidae

- ② *Ummidia fragaria* キノボリトタテグモ

○

		A	B	C	D	E
(3) Atypidae						
3	<i>Atypus karschi</i>	ジグモ	○			
(4) Amaurobiidae						
④	<i>Amaurobius flaridorsalis</i>	セスジガケジグモ	○			
(5) Theridiidae						
5	<i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	○	○		
6	<i>A. lunata</i>	カグヤヒメグモ			○	
7	<i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	○	○		
8	<i>A. sp</i>					○
9	<i>Ariamnes cylindrogaster</i>	オナガグモ	○			
⑩	<i>Cyrysso venusta</i>	コガネヒメグモ	○	○		
11	<i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジグモ	○	○		
12	<i>D. mustelina</i>	カニミジグモ		○	○	
13	<i>Enoplognatha margarita</i>	シロタマヒメグモ			○	○
14	<i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	○			
⑮	<i>E. nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	○	○		
⑯	<i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ	○			
⑰	<i>Theridion betteni</i>	キヨサトヒメグモ			○	
18	<i>T. japonicum</i>	ヒメグモ	○			
⑱	<i>T. kompirense</i>	コンビラヒメグモ			○	
20	<i>T. nigrolimbatus</i>	タカネヒメグモ			○	
21	<i>T. rapulum</i>	ギボシヒメグモ	○	○	○	
⑳	<i>T. sterninotatus</i>	ムナボシヒメグモ		○		
㉑	<i>T. subadultum</i>	コケヒメグモ	○	○	○	
24	<i>T. takayense</i>	タカユヒメグモ		○		
(6) Linyhiidae						
㉒	<i>Floronia bucculenta</i>	ハナサラグモ		○		○
㉓	<i>Lobulla contortipes</i>	アシヨレグモ	○		○	
㉔	<i>Linyhia clathrata</i>	コウシサラグモ			○	
28	<i>L. oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	○			
29	<i>Neolinyhia angulifera</i>	ハンモツクサラグモ			○	
30	<i>N. japonica</i>	ツリサラグモ				
㉕	<i>N. nigripectoris</i>	ムネグロサラグモ	○	○	○	
32	<i>Prolinyhia longipedella</i>	アシナガサラグモ			○	○

		A	B	C	D	E
33	<i>P. marginella</i>			○	○	○
34	<i>P. yunohamensis</i>	○				
35	<i>Tapinopa longidens</i>			○	○	○
(7) <i>Erigonidae</i>						
36	<i>Namatogmus sanguinolentus</i>		○			
(8) <i>Symphytognathidae</i>						
37	<i>Conoculus lyugadinus</i>	○				
(9) <i>Araneidae</i>						
38	<i>Oyulnius agnoscus</i>	○				
(10) <i>Theridiosomathidae</i>						
39	<i>Araneus ishisawai</i>		○	○	○	
40	<i>A. macacus</i>		○	○		
41	<i>A. ventricosus</i>	○	○			○
42	<i>A. pinguis</i>				○	○
43	<i>A. tsuno</i>	○				
44	<i>A. trigittatus</i>	○	○	○	○	○
45	<i>A. displicatus</i>	○				
46	<i>A. viperifer</i>	○				
47	<i>Neoscona doenitzi</i>	○		○	○	
48	<i>N. mellottei</i>	○				
49	<i>N. scylla</i>	○	○			
50	<i>N. scylloides</i>	○				
51	<i>Hypsosinga sanguinea</i>					○
52	<i>Pronous minutus</i>					○
53	<i>Zilla sachalinutus</i>	○				
54	<i>Argiope fruennichii</i>	○				
55	<i>A. minuta</i>	○				
56	<i>Chorizopes nipponicus</i>	○				
57	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	○				
58	<i>C. atrata</i>	○	○	○		
59	<i>C. japonica</i>	○				
60	<i>C. sedeculata</i>	○				
61	<i>Cyrtarachne bufo</i>	○				
62	<i>C. inaequalis</i>	○				

		A	B	C	D	E
63	<i>C. nagasakiensis</i>		○			
64	<i>Metleucauge kompirensis</i>	○				
65	<i>Meta. menardi</i>		○			
66	<i>M. reticuloides</i>	○				
67	<i>M. segmentata</i>		○	○	○	○
68	<i>Nephila clavata</i>		○			

(11) *Tetragnathidae*

69	<i>Leucauge magnifica</i>	○				
70	<i>L. sabblanda</i>	○				
71	<i>L. subgemmea</i>	○	○		○	
72	<i>Menosira ornata</i>	○				
73	<i>Tetragnatha extensa</i>					○
74	<i>T. pinicola</i>		○	○	○	○
75	<i>T. squamata</i>			○		
76	<i>T. yesoensis</i>		○	○		

(12) *Urocteidae*

77	<i>Uroctea compactilis</i>		○			
----	----------------------------	--	---	--	--	--

(13) *Agelenidae*

78	<i>Agelena limbata</i>	○	○			
79	<i>A. labyrinthica</i>					○
80	<i>A. opulenta</i>	○				
81	<i>Coelotes modestus</i>	○	○	○		

(14) *Pisauridae*

82	<i>Dolomedes raptor</i>	○				
83	<i>D. sulfureus</i>	○	○			

(15) *Lycosidae*

84	<i>Pardosa astrigera</i>		○		○	
85	<i>P. brevivulva</i>				○	
86	<i>Xerolycosa nemoralis</i>					○

(16) *Thomisidae*

87	<i>Cariarachne fulvipes</i>		○			
88	<i>Misumenopo japonicus</i>	○				
89	<i>M. tricuspidatus</i>		○			
90	<i>Oxytate striatipes</i>	○	○			

		A	B	C	D	E
91	<i>Philodromus aureolus</i>			○		
92	<i>P. flavidus</i>		○			
93	<i>P. spinitarsis</i>	○				
94	<i>P. subaureolus</i>	○				
95	<i>Pistius truncatus</i>	○	○			
96	<i>Synaeama glofosum japonicum</i>	○				
97	<i>Tibellus tenellus</i>	○				
98	<i>Tmarus rimosus</i>			○		
99	<i>Xysticus croceus</i>		○			
100	<i>X. ephippiatus</i>	○				
101	<i>X. saganus</i>	○				
(17) Salticidae						
102	<i>Dendryphantes atratus</i>	○				
103	<i>Evarcha albaria</i>	○				
104	<i>Harmochirus doenitzi</i>	○				
105	<i>Jotus difficilis</i>		○			
106	<i>Morpissa pomatia</i>			○		○
107	<i>M. roemeri</i>		○			
108	<i>Yaginumaella ususudi</i>	○	○			
109	<i>Plexippus annulipedis</i>	○				
(18) Clubionidae						
110	<i>Chiracanthium japonicum</i>	○	○	○	○	
111	<i>Clubiona japonica</i>			○		
112	<i>C. jucunda</i>	○				
113	<i>C. vigil</i>	○				
114	<i>Itatsina praticola</i>	○				
(19) Heteropodidae						
115	<i>Heteropoda forcipata</i>	○				
116	<i>Micrommata roseum</i>	○	○	○		○
(20) Ctenidae						
117	<i>Anahita fauna</i>	○				
118	<i>Zora spinimana</i>					○
(21) Gnaphosidae						
119	<i>Poecilochroa hosiziro</i>			○		

ま と め

- 赤城山における談話会合宿の成果は119種であった。3日間の採集記録として最も標準的な数字と考えられる。
- 赤城山の地蔵岳(1,673m)ではさすがに北方系の種であるシロタマヒメグモ、コシロブチサラグモ、カナコキグモ、アカオニグモ、マメオニグモ、キタドヨウグモ、ハラビロアシナガグモ、ミドリアシナガグモ、モリコモリグモ、ヤバネハエトリグモ等が採集でき、ある程度の垂直分布を確認することができた。
- 三夜沢の赤城神社境内にて、ムラクモヒシガタグモのX形の網と捕食行動・生態写真の撮影に成功し、アリを食する行動を観察することができた。
- 今回の合宿の結果、群馬県のアウナにカネコタテグモ、キノボリタテグモ、セスジガケジグモ等43種が新たに加わるようになった。

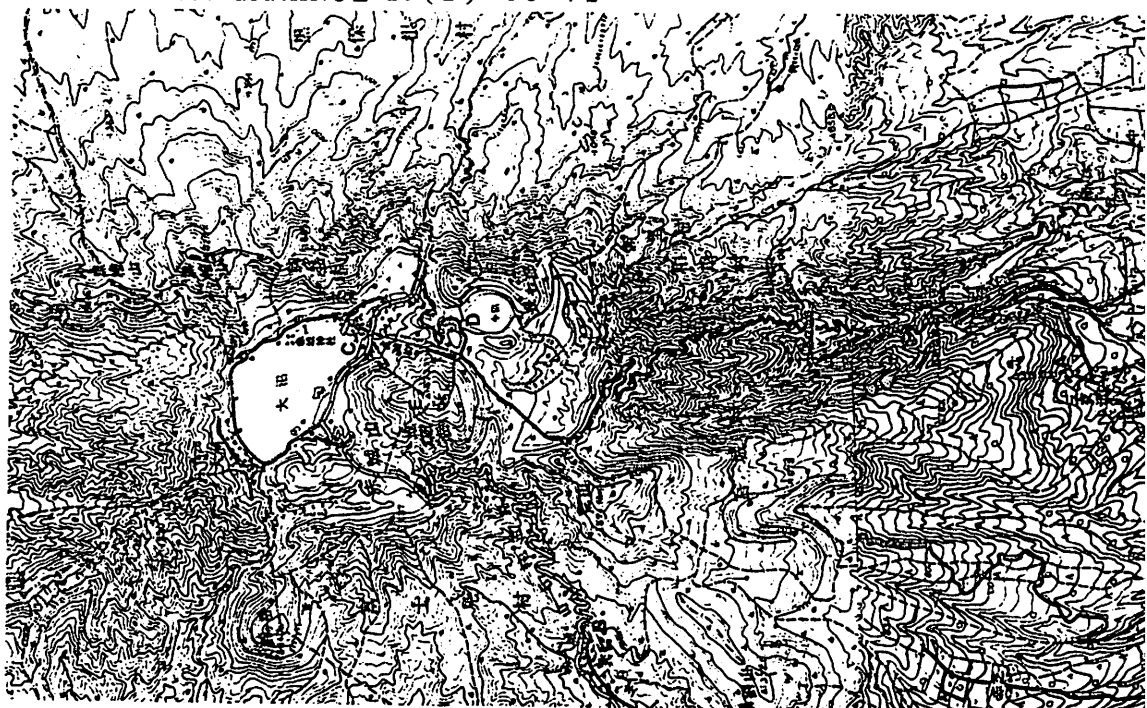
赤城山に関する文献

植村 利夫 (1961) オニグモ *Araneus ventricosus* (L. Koch) の変異とその系統及び分布に関する研究 東亜蜘蛛学会

斉藤 博 (1979) 栃木県産サラ・コサラグモに就いて(II) インセクト30(2)79-83

林俊夫・斉藤博(1980) 赤城山の真正蜘蛛類(I) 群馬生物(29) 5-10

SAITO, H., (1980) Description of two new species of the genus *Tapinocyba* SIMON (ARANEAE. ERIGONIDAE) from Japan. *Act arachNOL* 29(2) 65-72



神奈川県立野庭高等学校周辺の真正蜘蛛類

谷川 明 男 (神奈川県立野庭高等学校)

飯島 寿子・上野 妙子・森 美也子
(神奈川県立野庭高等学校生物部)

1979年4月より、神奈川県立野庭高等学校周辺の真正蜘蛛類の調査を続けているが、1981年8月現在で23科77属127種のクモを採集することができたのでここに報告する。

野庭高校は横浜市の南西部、港南区野庭町に位置し、港南区上永谷町、戸塚区舞岡町と隣接している。周辺部はここ十数年の間に急速に宅地化され、野庭町はそのほとんどが高層住宅の密集する野庭団地となっている。しかし、上永谷町、舞岡町は比較的开发が遅れており、まだわずかながら緑地が残されている。調査は主に戸塚区舞岡町と港南区上永谷町の雑木林において、ハンドソーティングにより行なった。

学名、和名および科、属、種の配列は、八木沼(1977, 1978, 1980, 1981)に従った。

なお、一部種名の同定にあたっては、熊田憲一氏、新海栄一氏、田中穂積氏、松本誠治氏の御指導をいただいた。ここに厚くお礼申し上げる。

Antrodiaetidae カネコトタテグモ科

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. KOCH, 1878) カネコトタテグモ

Atypidae ジグモ科

2. *Atypus karschi* DÖNITZ, 1887 ジグモ

Dictynidae ハグモ科

3. *Dictyna felis* BÖSENBERG, et STRAND, 1906 ネコハグモ

Uloboridae ウズグモ科

4. *Hyptiotes affinis* BÖS. et STR., 1906 オウギグモ

5. *Miagrammopes orientalis* BÖS. et STR., 1906 マネキグモ

6. *Uloborus sybotides* (BÖS. et STR., 1906) カタハリウズグモ

Pholcidae ユウレイグモ科

7. *Pholcus crypticolens* BÖS. et STR., 1906 ユウレイグモ

8. *Spermophora senoculata* (DUGÈS, 1836) シモングモ

Theridiidae ヒメグモ科

9. *Achaearanea angulithorax* (BÖS. et STR., 1906) ツリガネヒメグモ

10. *A. asiatica* (BÖS. et STR., 1906) キヒメグモ

11. *A. tepidariorum* (C. KOCH, 1841) オオヒメグモ

12. *Anelosimus crassipes* (BÖS. et STR., 1906) アシプトヒメグモ
13. *Ariamnes cylindrogaster* SIMON, 1888 オナガグモ
14. *Argyroides bonadae* (KARSCH, 1881) シロカネイソウロウグモ
15. *A. fissifrons* O. P. CAMBRIDGE, 1869 チリイソウロウグモ
16. *A. fur* BÖS. et STR., 1906 フタオイソウロウグモ
17. *A. saganus* (DÖN. et STR., 1906) ヤリグモ
18. *Diplocephala mustelina* (SIMON, 1888) カニミジグモ
19. *D. punctisparsa* YAGINUMA, 1967 シモフリミジグモ
20. *Enoplognatha transversifoveata* (BÖS. et STR., 1906) カレハヒメグモ
21. *Steatoda cavernicola* (BÖS. et STR., 1906) ハンゲツオスナキグモ
22. *Stemmops nipponicus* YAGINUMA, 1969 スネグロオチバヒメグモ
23. *Theridion chikunii* YAGINUMA, 1960 バラギヒメグモ
24. *T. japonicum* BÖS. et STR., 1906 ヒメグモ
25. *T. octomaculatum* BÖS. et STR., 1906 ヤボシヒメグモ
26. *T. sterninotatum* BÖS. et STR., 1906 ムナボシヒメグモ
27. *T. subadultum* BÖS. et STR., 1906 コケヒメグモ
- Linyphiidae* サラグモ科
28. *Floronina bucculenta* (CLERCK, 1758) ハナサラグモ
29. *Linyphia oidedicata* (HELSDINGEN, 1969) ヘリジロサラグモ
- Erigonidae* コサラグモ科
30. *Oedothorax insecticeps* BÖS. et STR., 1906 セスジアカムネグモ
- Mimetidae* センショウグモ科
31. *Ero japonica* BÖS. et STR., 1906 センショウグモ
- Araneidae* コガネグモ科
32. *Araneus ventricosus* (L. KOCH, 1878) オニグモ
33. *A. lugubris* (WALCKENAER, 1841) コゲチャオニグモ
34. *A. abscissus* (KARSCH, 1879) キザハシオニグモ
35. *A. ejusmodi* BÖS. et STR., 1906 ヌサオニグモ
36. *A. mitificus* (SIMON, 1886) ビジョオニグモ
37. *A. pentagrammicus* (KARSCH, 1879) アオオニグモ
38. *A. semilunaris* (KARSCH, 1879) マルヅメオニグモ
39. *Neosconna doenitzi* (BÖS. et STR., 1906) ドヨウオニグモ
40. *N. mellottei* (SIMON, 1985) ワキグロサツマノミダマシ
41. *N. nautica* (L. KOCH, 1875) イエオニグモ
42. *N. scylla* (KARSCH, 1879) ヤマシロオニグモ

43. *N. scylloides* (BÖS. et STR., 1906) サツマノミダマシ
44. *Zilla sachalinensis* (SAITO, 1934) カラフトオニグモ
45. *Argiope bruennichii* (SCOPOLI, 1772) ナガコガネグモ
46. *A. minuta* KARSCH, 1879 コガタコガネグモ
47. *Chorizopes nipponicus* YAGINUMA, 1963 ヤマトカナエグモ
48. *Cyclosa octotuberculata* KARSCH, 1879 ゴミグモ
49. *C. sedeculata* KARSCH, 1879 ヨツデゴミグモ
50. *Cyrtarachne bufo* (BÖS. et STR., 1906) トリノフンダマシ
51. *C. inaequalis* THORELL, 1895 オオトリノフンダマシ
52. *C. nagasakiensis* STRAND, 1916 シロオビトリノフンダマシ
53. *Cyrtophora moluccensis* (DOLESCHALL, 1857) スズミグモ
54. *Larinia argiopiformis* BÖS. et STR., 1906 コガネグモダマシ
55. *Meta reticuloides* YAGINUMA, 1958 ヤマジドヨウグモ
56. *Metleucauge yunohamensis* (BÖS. et STR., 1906) メガネドジョウグモ
57. *Nephila clavata* L. KOCH, 1878 ジョロウグモ
58. *Poltys illepidus* C. KOCH, 1843 ゲホウグモ

Theridiosomatidae

59. *Ogulinus pullus* BÖS. et STR., 1906 ヤマジグモ

Tetragnathidae アシナガグモ科

60. *Leucauge blanda* (L. KOCH, 1878) チュウガタシロカネグモ
61. *L. magnifica* YAGINUMA オオシロカネグモ
62. *L. subblanda* BÖS. et STR., 1906 コシロカネグモ
63. *L. subgemmea* BÖS. et STR., 1906 キララシロカネグモ
64. *Tetragnatha japonica* (BÖS. et STR., 1890) ヤサガタアシナガグモ
65. *T. praedonia* L. KOCH, 1878 アシナガグモ
66. *T. squamata* KARSCH, 1879 ウロコアシナガグモ

Urocteidae ヒラタグモ科

67. *Uroctea compactilis* L. KOCH, 1878 ヒラタグモ

Agelenidae タナグモ科

68. *Agelena limbata* THORELL, 1879 クサグモ
69. *A. opulenta* L. KOCH, 1878 コクサグモ
70. *Coelotes exitialis* L. KOCH, 1878 ヤチグモ
71. *C. insidiosus* L. KOCH, 1878 シモフリヤチグモ
72. *C. luctuosus* L. KOCH, 1878 メガネヤチグモ
73. *C. modestus* SIMON, 1880 ヤマヤチグモ

Pisauridae キンダグモ科

74. *Dolomedes sulfureus* L. KOCH, 1878 イオウイロハシリグモ
75. *Pisaura lama* BÖS. et STR., 1906 アズマキンダグモ

Lycosidae コモリグモ科

76. *Lycosa coelestis* (L. KOCH, 1878) ハラクロコモリグモ
77. *L. pseudoannulata* (BÖS. et STR., 1906) キクヅキコモリグモ
78. *Pardosa astrigera* L. KOCH, 1878 ウヅキコモリグモ
79. *P. cinereofusca* (DÖN. et STR., 1906) セアオコモリグモ
80. *P. laura* KARSCH, 1879 ハリゲコモリグモ
81. *Pirata clercki* (BÖS. et STR., 1906) クラークコモリグモ
82. *P. piraticus* (CLERCK, 1758) カイゾクコモリグモ
83. *P. procurvus* (BÖS. et STR., 1906) チビコモリグモ
84. *P. subpiraticus* (BÖS. et STR., 1906) キバラコモリグモ

Oxyopidae ササグモ科

85. *Oxyopes sertatus* L. KOCH, 1878 ササグモ

Thomisidae カニグモ科

86. *Heriaeus mellottei* SIMON, 1886 アシナガカニグモ
87. *Misumenops tricuspidatus* (FABRICIUS, 1775) ハナグモ
88. *Oxyptila decorata* KARSCH, 1879 キハダカニグモ
89. *Oxytate striatipes* L. KOCH, 1878 ワカバグモ
90. *Philodromus suboreolus* BÖS. et STR., 1906 アサヒエビグモ
91. *Thomisus labefactus* KARSCH, 1881 アズチグモ
92. *Tibellus tenellus* (L. KOCH, 1876) シヤコグモ
93. *Thanatus formicinus* (CLERCK, 1758) ヤドカリグモ
94. *Tmarus rimosus* PAIK, 1973 セマルトラフカニグモ
95. *Xysticus croceus* FOX, 1937 ヤミイロカニグモ

Salticidae ハエトリグモ科

96. *Aelurillus festivus* L. KOCH, 1834 ヤマジハエトリ
97. *Boethus sexdentatus* YAGINUMA, 1967 ムツバハエトリ
98. *Carrhotus xanthogramma* (LATREILLE, 1819) ネコハエトリ
99. *Dendryphantes atratus* (KARSCH, 1881) カラスハエトリ
100. *Evarcha albaria* (L. KOCH, 1878) マミジロハエトリ
101. *Harmochirus branchiatus* (THORELL, 1877) ウデブトハエトリ
102. *Hasarius doenitzii* KARSCH, 1879 デーニッツハエトリ
103. *Icius linea* (KARSCH, 1879) メガネアサヒハエトリ

104. *Jotus abnormis* (BÖS. et STR., 1906) チャイロアサヒハエトリ
 105. *J. difficilis* (BÖS. et STR., 1906) マガネアサヒハエトリ
 106. *Marpissa elongeta* (KARSCH, 1879) ヤハズハエトリ
 107. *M. roemeri* STRAND, 1906 オオハエトリ
 108. *Myrmarachne innermichelis* BÖS. et STR., 1906 ヤサアリグモ
 109. *M. japonica* (KARSCH, 1879) アリグモ
 110. *Plexippus paykulli* (AUDOUIN, 1827) チャスジハエトリ
 111. *P. setipes* KARSCH, 1879 ミスジハエトリ
 112. *Silerella vittata* (KARSCH, 1879) アオオビハエトリ

Clubionidae フクログモ科

113. *Chiracanthium eutittha* BÖS. et STR., 1906 アシナガコマチグモ
 114. *C. japonicum* BÖS. et STR., 1906 カバキコマチグモ
 115. *C. lascivum* KARSCH, 1879 ヤマトコマチグモ
 116. *C. unicum* BÖS. et STR., 1906 ヤサコマチグモ
 117. *Clubiona japonica* L. KOCH, 1878 ヤマトフクログモ
 118. *C. vigil* KARSCH, 1879 ムナアカフクログモ
 119. *Itatsina praticola* (BÖS. et STR., 1906) イタチグモ
 120. *Phrurolithus komurai* YAGINUMA, 1952 コムラウラシマグモ
 121. *P. nipponicus* KISHIDA, 1914 ウラシマグモ
 122. *P. pennatus* YAGINUMA, 1964 ヤバネウラシマグモ
 123. *Trachelas japonicus* BÖS. et STR., 1906 ネコグモ

Heteropodidae アシダカグモ科

124. *Heteropoda forcipata* (KARSCH, 1881) コアシダカグモ
 125. *H. venatoria* (LINNÉ, 1758) アシダカグモ

Ctenidae シボグモ科

126. *Anahita fauna* KARSCH, 1879 シボグモ

Gnaphosidae ワシグモ科

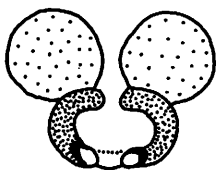
127. *Gnaphosa kompirensis* BÖS. et STR., 1906 メキリグモ

53 スズミグモ, 60 チュウガタシロカネグモの2種については, 前者は24-VII-1980に, 後者は28-IV-1980にそれぞれ1頭ずつ採集されただけである。この2種の分布域を考えあわせると, 当地に分布していることはなほ疑問であり, パルーニグ時の気流の具合等でたまに飛来し, 生活していたものと思われる。

参 考 文 献

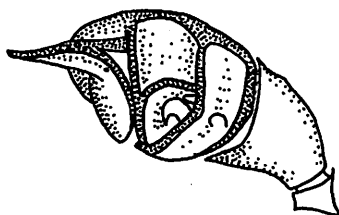
- 千国安之輔・八木沼健夫, 1976. オスクロハエトリとヤハズハエトリ。Atypus, 67: 33-34
- 熊田憲一, 1980. 三浦半島の蜘蛛。Kishidaia, 45: 9-27
- 松本誠治, 1973. キヒメグモ (*Achaearanea asiatica*) について。Atypus, 61: 9-14
- 松本誠治・新海栄一・小野展嗣, 1976. 学研の図鑑 クモ。学研
- 松本誠治, 1978. 日本産ハエトリグモの雄10種。動物と自然, 8(5): 8-11
- 西川喜朗, 1974. 日本産ヤチグモ属 (*Coelotes*) 総説。Fac. Let. Rev. Otemon Gakuin Univ., 8: 174-182
- 新海栄一, 1969. 東京都産真正蜘蛛類。東亜蜘蛛学会
- TANAKA, HOZUMI, 1974. Japanese wolf spiders of Genus *Pirata*, with descriptions of five new species (*Araneae: Lycosidae*). *Acta arachnol.*, 26(1): 22-46
- 田中穂積, 1975. 日本に産するカイゾクコモリグモ属 (*Pirata*) の諸種について。Atypus, 65: 3-6
- 八木沼健夫, 1960. 原色日本蜘蛛類大図鑑。保育社
- , 1966. コマチグモの見分け方。Atypus, 39-38
- , 1968. アサヒハエトリのPalpによる見分け方。Atypus, 48: 表紙
- YAGINUMA, Takeo, 1969. A New Japanese Spider of the Genus *Stemmops*. *Acta Arachnol.*, 22: 14-16
- 八木沼健夫, 1976. ムナアカフクログモとヤマトフクログモ。Atypus, 67: 35-37
- , 1977. 日本産真正蜘蛛類目録 *Acta Arachnol.*, 27: 367-406
- , 1978. 日本産真正蜘蛛類目録 補遺(1)。Atypus, 71: 15-19
- , 1980. 日本産真正蜘蛛類目録 補遺(2)。Atypus, 76:
- , 1981. 日本産真正蜘蛛類目録 補遺(3)。Atypus, 78: 1-4
- 山川守, 1973. 横浜のクモ — 保土ヶ谷 — 。Kishidaia, 36: 1-5

1



キヒメグモ♀外雌器

2



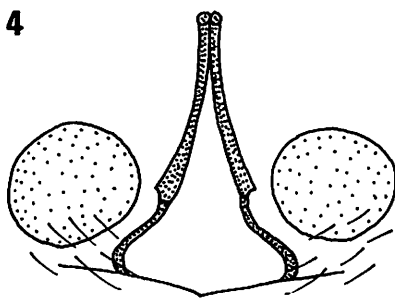
キヒメグモ触肢

3



スネグロオチバヒメグモ♀外雌器

4



ヤパネウラシマグモ♀外雌器

編 集 後 記

あのKishidaia が忘却の彼方より郵便で、皆さまの手元へ届きました。このKishidaia も本来なら1年間に2回発行される予定ではありますが、誰かさんの編集不慣れも手伝って、昨年発行できるはずのものが大幅に遅れ、とうとう本年度までくい込んでしまいました。

会員の皆さまのなかには、この Kishidaia が、いつ来るのか、いつ来るのかと首をいっぱいのばして待っていた方もおられるでしょう。本当に御迷惑をおかけしました。恥かしながら、この場をお借りし陳謝いたします。また以後この様な失敗の繰返しをできるだけ避けるように、私、編集担当貞元をはじめ談話会運営員一同精一杯努力いたしますので、会員の皆さまの Hot な協力もよろしくお願い申し上げます。

最後に、この48号 Kishidaia を編集するにあたり、多大な御協力と助言を頂きました新海栄一氏に厚くお礼申し上げます。

K I S H I D A I A No.48

1982年4月29日 印刷 編集者 貞 元 己 良

1982年4月30日 発行 発行者 萱 嶋 泉

発行所 東京 蜘蛛 談 話 会

〒191 東京都日野市豊田1896 萱 嶋 泉

印刷所 サ ン ラ イ ズ

〒102 東京都千代田区飯田橋1-12-14